

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：英語グローバル学科

資格：准教授

氏名：K. A. バート

研究分野	研究内容のキーワード
応用言語学、第二言語学習得、日本学、社会文化人類学 Applied Linguistics, Second Language Acquisition, Japanese Society, Culture and Anthropology	第二言語習得、コミュニケーション言語教育、トランス・ランゲージング、内容言語統合型学習、社会文化人類学 SLA, CLT, Translanguaging, CLIL, Japanese Society, Anthropology and Culture.
学位	最終学歴
博士（応用言語学） Doctor of Education (USQ) 修士（日本学） MA in Advanced Japanese Studies (Sheffield) 修士（応用言語学） Master of Applied Linguistics (USQ) 準修士（教育学） Graduate Diploma in Secondary Education (VU) 学士（日本学・言語学） Bachelor of Arts (La Trobe)	Doctor of Education- University of Southern Queensland オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学言語教育研究科応用言語学専攻博士 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 教育方法	2005年1月現在	学生各個人の学力だけでなく、性格や環境などの背景をできるだけ把握し、接し方やそれぞれのレベルに合わせた課題の提供を検討する。 外国語の授業として、実践的な英語を強化するための教材を作成し、英語を聞く・話す・読む・書く機会を与える。アクティブラーニングやタスクに基づく言語学習の中心に、トランスランゲージングを使用し、学生の理解を深める。 社会学の授業において、異文化の見解の相違について話し、国際関係の理解を高める。学生が意見を交わすためにディベートやディスカッション、プレゼンテーションを実施し、考える機会を与える。 修士課程および博士課程の学生の論文や発表の研究ガイダンスを指導し、批判的思考力を伸ばすためのアドバイスを与える。
2 作成した教科書、教材		
1. 武庫川女子大学の教材	2021年4月1日から現在	大学英語コミュニケーション科目教材作成、ビジネスライティング教材作成、リーディング教材作成、ライティング教材作成、英語学演習教材作成。ACE科目教材作成、現代コミュニケーション教材作成、卒業研究（ゼミ）担当、論文英語演習教材作成。2024年から英語文化専攻の全てのコミュニケーション科目を作成。
2. 鳥取大学の教材	2019年10月1日から2021年3月31日	コミュニケーション教科書作成・編集、実践英語A・B教材作成、総合英語3・4教材作成、英語教育カリキュラムガイド作成、イマージョンプログラム作成。
3. 関西学院大学の教材	2016年4月1日から2019年9月20日	千川英語集中講座のHomework Pack 作成、オープンキャンパス体験授業構築。大学レベルのコミュニケーション、リーディング、ライティング、EAP、ESP、TOEIC、科学技術英語教材作成。
4. 平松学園の教材	2005年7月24日から2016年3月31日	高校生・短大生のコミュニケーション、リーディング、ライティングの教材作成。留学生の日本語教材作成。海外研修引率。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学	2021年4月1日から現在	武庫川女子大学英語グローバル学科の准教授。国際センター・外国語教育推進委員、国際化専門委員会、外国人非常勤講師コーディネーター委員会、文学部教授委員会、大学院研究委員会、ACE運営委員会、学科フォーシオン日下懇談会委員。担当科目：大学で学生担任（ホームルーム）、現代コミュニケーション、ビジネスライティング、ライティング、リーディング、スピーキング、英語学演習、社会言語学、卒業研究（3年と4年ゼミ）。大学院で論文英語特殊演習、論

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
2. 鳥取大学	2019年10月1日から2021年3月31日	文英語演習、修士生の指導教員、博士生に副指導教員。 鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター外国語部門の准教授。すべての外国語科目の担当、大学入試作成・監督・採点、センター試験監督、オンライン授業設置、常勤・非常勤講師のオンライン授業に関する説明会担当、E-Learning指導。担当科目：コミュニケーション英語、実践英語、総合英語、上級英語。
3. 関西学院大学	2016年4月1日から2019年9月20日	関西学院大学理工学部の常勤講師で、外国人オフィス管理人、千刈英語集中キャンプのコーディネーター、理工学部のELR教務会のメンバー。担当科目：コミュニケーション、リーディング、ライティング、科学技術英語。
4. 平松学園	2005年7月24日から2016年3月31日	高校教員で国際コースと特進コース担当。留学プログラム担当、部活顧問、英語弁論大会・暗唱大会の指導。担当科目：オーラルコミュニケーション、英語ライティング、英語リーディング、英語会話、コミュニケーション英語、入試英語、留学生の日本語、留学生の日本社会。
5. ベイサイド高等学校	2005年1月23日から2005年6月30日	高校教員 担当科目：外国語としての日本語、英語、英語文学、社会学。
4 その他		
1. 2024年度地域別懇談会（本都会場）	2024年9月28日	保護者と学生と進路・学習・留学について相談。
2. 教員採用試験面接練習指導	2024年7月1日2024年7月29日	MUKOJO+MOREの講義2回「教員採用英語面接指導」を行った。
3. 2024年度オープンキャンパス	2024年6月2024年10月	英語グローバル学科でのオープンキャンパスを参加し英語文化専攻の「英語体験授業」を2回行った（6月23日、8月10日）。全5回のオープンキャンパスを参加し保護者と相談しました。
4. JUSTEC学会運営委員	2024年4月2025年9月	JUSTEC学会2025の運営委員
5. 2023年度地域別懇談会（本都会場）	2023年9月23日	保護者と学生と進路・学習・留学について相談。
6. 教員採用試験面接練習指導	2023年7月19日2023年8月4日	MUKOJO+MOREの講義3回「教員採用英語面接指導」を行った。
7. 2023年度オープンキャンパス	2023年6月25日から3回	英語グローバル学科での「オープンキャンパス英語体験授業」を行って、保護者と相談しました。6月25日、7月9日、8月11日
8. 日下／フォッシー国際交換特別教授職プログラム	2023年5月7日2023年5月16日	国際交換特別教授職プログラムの交換教授として選出され、Eastern Washington University で学生への講義や市民公開講座を担当した。教えた科目は日本語、日本社会、言語学、バイリンガリズム、教育学習
9. 第38回武庫川学院英語オラトリカルコンテスト	2022年10月28日2022年11月12日	大学英語スピーチコンテストの審査員
10. 2022年度地域別懇談会（高松会場）	2022年9月11日	英語文化学科代表教授で、学生と保護者などの相談。
11. 教員採用試験面接練習指導	2022年7月8日2022年9月14日	小・中・高の教員免許を取得したい学生の英語面接練習を担当しています。
12. 2022年度特別ゼミ	2022年6月14日	アメリカ分校から帰国後の特別ゼミを教えました。「英語と日本語を活かして、世界理解を深めよう」という内容。
13. 学科日下／フォッシー国際交換特別教授職プログラム委員	2022年4月1日現在	Eastern Washington University の教授がフォッシー日下プログラムを参加し、学科代表としてプログラム運営、在中に来訪者を案内し、授業に同行し、研究討議をした。
14. 入試作成委員	2022年4月1日2023年3月31日	入試問題を作成し、試験場の待機
15. 高3年入学前講義	2022年2月16日	武庫川女子大学を入学する前の武庫川女子高校三年生対象の「Critical thinking in the English classroom」講義を行った。
16. 第37回武庫川学院英語オラトリカルコンテスト	2021年11月20日	大学生スピーチコンテストの審査員
17. 2021年度オープンキャンパス	2021年8月10日	英語文化学科での「オープンキャンパス英語体験授業」を行って、保護者と相談しました。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
18. 教員採用試験面接練習指導	2021年7月6日から現在2021年9月6日	小・中・高の教員免許を取得したい学生の英語面接練習を担当しています。
19. 2021年度特別ゼミ	2021年6月23日	アメリカ分校から帰った学生のための特別ゼミを教えました。テーマは「第一と第二言語を生かすためのトランスランゲージング法」
20. 入試作成委員	2021年4月1日現在2022年3月31日	入試問題を作成し、試験場の待機
21. 外国語推進・国際化専門委員会	2021年4月1日現在	外国語推進・国際化専門委員会の委員で、全学の英語教育支援、留学活動などを支援する。
22. 外国人非常勤講師コーディネーター	2021年4月1日から現在	外国人非常勤講師のコーディネーターで、すべての授業や教務に関するサポートをしています。
23. 外国語教育推進室委員	2021年4月1日から現在	大学全体の英語教育を推進するための委員会。
24. 夏のイマーショナルプログラム担当	2020年8月23日から2020年8月26日	鳥取大学夏休み期間中イマーショナルプログラムのコーディネーター。プログラム作成、講師の指導などしました。
25. 教育支援・国際交流推進機構委員	2019年10月から2021年3月	鳥取大学の教育支援・国際交流推進機構委員で、教育センターのコース開発、留学生サポートなどしました。
26. 千刈英語集中講座のコーディネーター	2017年4月から2019年9月	関西学院大学理工学部の3・4年生の一週間千刈英語集中講座のコーディネーターで、千刈キャンプ場に引率、プログラム作成など。
27. 高文連の弁論・暗唱・ディベート大会指導と審査員	2005年7月26日2016年3月31日	毎年、高校生のスピーチや暗唱、ディベート大会の指導と審査。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 日本語能力試験1級JLPT N1	2010年	国際交流基金と日本国際教育支援協会
2. 通訳・翻訳講座修了	2007年3月	財団法人自治体国際化協会
3. 教員免許取得	2007年現在	ビクトリア州教員教育委員会登録「登録番号：334398」
4. 上級日本語講座修了	2006年5月	財団法人自治体国際化協会
2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学	2021年4月1日から現在	文学部教授会委員、入試会委員、外国語教育推進室委員、国際化専門委員、ACEプログラム委員、外国人非常勤講師コーディネーター委員、英語グローバル学科委員、文学部研究科委員、英語文化専攻委員で専攻すべてのコミュニケーション科目をコーディネート。
2. 大学院指導	2020年7月1日から現在	大学院論文指導、博士論・修士論の外部審査官。
3. 鳥取大学	2019年10月1日から2021年4月1日	教育支援・国際交流推進機構全体会議教務委員、教育センター会議の教務委員、外国語部門英語非常勤講師担当、大学入試作成・監督・採点。
4. 関西学院大学	2016年4月1日から2019年9月20日	ELR教務会のメンバー、外国人オフィス管理人、千刈英語集中講座コーディネーター。
5. 平松学院	2005年7月24日から2016年3月31日	高校・短大の教諭、HP担当、部活顧問、英語教育開発。
6. バイサイド高等学校	2005年1月23日から2005年6月30日	バイサイド高校の教育実習（日本語とESL）。

4 その他		
--------------	--	--

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. Teachers' and students'	単	2020年8月31日	サザンクイーンズランド大学大学院	オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学大学院言語学研究科応用言語学専攻博士課程卒業論文。「コミュニケーション言語教

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
experiences within the Communicative Language Course of Study in Japan: An instrumental case study	単	2011年11月4日	の博士論文 Ed.D thesis, University of Southern Queensland.	育と日本の新カリキュラム：日本社会でどのようにしてCLTを上手く使うか」社会学や日本文化について調べ、アンケートとインタビューを実施し、教師の意見と卒業生の意見を調査した。コミュニケーション言語教育の経験や教師の新カリキュラムの不安などについてまとめ、意見を述べた。
2. Sex and the Japanese: An investigative study of married couples, LGBT identifying individuals and Red-Light district workers in regard to their gender roles and sexual practices	単	2011年11月4日	英国国立シェフィールド大学大学院の修士論文 MA thesis, University of Sheffield	英国国立シェフィールド大学大学院東アジア研究科日本研究専攻修士課程の卒業論文。「田舎に住んでいるセックスレス夫妻・同性愛者・水商売に関するセックスとジェンダー」主にインタビューを中心に上記の人たちの意見を聞き、その結果をもとに、田舎に住んでいる日本人の同性愛者・セックスレス夫妻・水商売の日常生活のつらさについての論文を提出した。
3. Communicative teaching: An investigative study of foreign language teachers' perceptions towards CLT and the new curriculum.	単	2011年9月3日	オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学大学院の修士論文 Master of Applied Linguistics thesis, University of Southern Queensland	オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学大学院教育学研究科応用言語学研究専攻修士課程の卒業論文。「コミュニケーション言語教育と日本の新カリキュラム：教師の意見についての調査」二つの高校に勤めている教師にアンケートとインタビューを実施し、コミュニケーション言語教育の経験や教師の抱く新カリキュラムの不安などについてまとめ、分析した。
3 学術論文				
1. Pedagogical Translanguaging in Japanese EFL Classes: A Case Study	単	2025年5月	PanSIG Journal 2024. ISBN# 978-4-901352-72-7	近年、ESL（第二言語としての英語）およびEFL（外国語としての英語）教育において、トランスランゲージング教育法が広がっている。学生が教室内で自らの全ての言語レパートリーを活用することを許可したことで、言語発達と知識構築の両面において有益であることが示されている（Deroo & Ponzio, 2019）。本研究では、教育的トランスランゲージングアプローチを検討し、その結果を報告する。具体的には、トランスランゲージングアプローチを用いて「卒業セミナー」クラスを受講した学生（n=28）を対象に調査を行い、L2の授業においてL1を取り入れることが、学生の言語発達および知識発達に有益であると感じたことを明らかにした。
2. From BICS to CALP: Developing Communication Courses within the EC Major	単	2025年3月	Mukogawa Literary Review (MLR) 62 号(pp.) 武庫川女子大学 英文学会紀要 ISSN: 1340-9441	本論文では、英語文化学科専攻におけるコミュニケーション科目の開発について探求し、それらの科目の創設、作成、および実施にあたって影響を与えた哲学的および理論的枠組みを概説した。前カリキュラムおよび改訂カリキュラムの双方においてコミュニケーション科目のコーディネーターを務めた立場から、これらの科目が現代の教育要件を満たすカリキュラムを作成するためにどのような主要な発展を遂げたかについて論じる。
3. From Student, to Teacher, to Researcher, and Back Again: How Experiences Shape Professional Development	単	2024年4月	Profectus, Vol. 29. pp. 115-131. ISSN:0919-3553 ・ Apr 1, 2024	研究者になるための旅について発表をした内容の論文。学生時代から研究者までの生きた経験を紹介し、研究者にとって「経験」と「実践」の大切さについて紹介した論文。
4. 英語学習のためのAI ツール使用に関するアンケート調査 —英語リテラシー教育プ	共	2024年3月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 Vol 31. pp.1-7. ISSN:	川西慧, 田中真由美, Kevin Bartlett, 佐々木頭彦。 本稿の著者らが所属する専攻では、英語学習にAI (artificial intelligence) を利用するリテラシー教育プログラムの枠組みを検討し、その実施に先んじて学生のAI ツール使用について調査した。そ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
プログラムの実施に向けてー			2436-7168	の結果、すでに多くの学生がAIに触れ、利用していることが明らかとなり、その多くがAIを肯定的に感じていることがわかった。また、AIを利用した学習については、AIに従来の教師のようなフィードバック機能を求めていることや、全体ではなく部分的な使用など、限定的な使用が適切だと思っていることなども明らかになった。
5. 外国語としての英語科目におけるトランスランゲージング教育法：理論的概要	単	2024年3月	Mukogawa Literary Review (MLR) 61号(pp.47-54) 武庫川女子大学英文学会紀要 ISSN: 1340-9441	本論文では、「トランスランゲージング」の理論的概要について概説した。トランスランゲージング教育法は日本ではまだ導入の初期段階にあるため、トランスランゲージング教育法は一体何なのか、どのような効果があるのか、そしてどのように授業で活かすのかを紹介した論文。
6. Developing Research Skills in Graduation Seminar Classes	単	2023年12月	AsiaTEFL 2023: Papers from the 21st AsiaTEFL Conference. pp. 537-545. (ISBN: 979-11-982534-0-8):	ブルームのタキノミーに従った卒業研究ゼミの授業設計方法を探求し、CLILやトランスランゲージング・アプローチを取り入れることによって、研究スキルの向上と言語習得を促進するために組み込まれたタスクの概要を説明した論文。
7. Translanguaging: Theoretical and Pedagogical Implications in the Japanese ESP classroom	単	2022年1月7日	OnCUE Journal Special Issue, Vol. 3, p.15-33 ISSN:1882-0220 査読:有	本研究は日本の大学のESP授業において実施したトランスランゲージングのアプローチについて報告するものである。本稿ではまず、トランスランゲージングの理論的背景を紹介し、英語の授業において学習者のL1（日本語）を取り入れることの利点を心理言語学、社会言語学、教育的視点から論じる。その後、授業内容の概説を通じて、トランスランゲージングがいかに学習者の言語リテンション、伝達アウトプット、動機付けの増大をもたらしたかを記述する。参加者は、90人の日本語を母語とする理工学専攻の大学生で、大学における必修としての英語授業を履修していた。当該英語授業では、専攻する理工学に関するトピックについての小論文の執筆や発表を行った。その結果、トランスランゲージングを用いて学習者の言語レパートリーの全てを活用させることが、動機付け、言語産出、学習内容の保持、認知方略の増大につながる事が明らかとなった。
8. An Analysis of student's experiences within the Communicative Course of study in Japan.	単	2021年6月3日	Tottori University Education Center Bulletin. Vol. 17. p. 43-64. ISSN: 2433-7862 査読:有	高等学校英語の新カリキュラムにおける学生の経験を探ったものである。77名の学生にアンケートを実施し、インタビューを行った。その結果、授業中に教員が英語を話す機会を与えてないこと、もっとコミュニケーションをとりたいこと、センター試験（大学入学共通テスト）の影響が大きいことのために新カリキュラムの目標に到達できなかったことが明らかになった。
9. Teacher Praxis in the Course of Study Guidelines in Japan: An Empirical Analysis	単	2020年8月	Australian Journal of Applied Linguistics, Vol 4 (2).p. 168-182. ISSN: 2209-0959 査読:有	高等学校英語の新カリキュラムにおける英語科教員の経験を探ったものである。21名の教員にアンケートとインタビューを実施した。その結果、教員は自身の英語コミュニケーション能力に自信がないこと、言語教育の指導方法を完全に理解していなかったこと、職場環境によりコミュニケーション重視の授業が実施できなかったため新カリキュラムの目標に到達できなかったことが明らかになった。
10. The influence of Socio-Cultural Constructs on Educational praxis in Japan.	単	2019年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 23. p. 73-82. ISSN: 1342-8853 査読:有	日本社会学理論で内・外や、先輩・後輩などの社会現象について説明し、教育活動や授業にどのような影響があるのかを述べた。
11. Applying translanguaging techniques in Japanese EFL settings.	単	2018年6月	IAFOR: The Asian Conference on Language Learning. Official Proceedings,	日本語と英語を一つの言語システムとして捉え、学生のアクセスができる資源として使えるというトランス・ランゲージングについての論文。二つの言語を同時に使えば、より学生の理解力が高まるという点を明らかにした。4つのクラスで調査し、二つのクラスでトランス・ランゲージングを使って、残りの二つのクラスでは使わずに、学期末のテスト結果や英語プレゼンの結果について分析し、学

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. The use of L1 in L2 classrooms in Japan: A case study of university student preferences.	単	2018年2月	2018 Vol.1 (1). p. 239-251. ISSN : 2186-4691 査読 : 有 Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 22. P. 71-80. ISSN: 1342-8853 査読 : 有	期末のアンケートの結果をまとめて述べた。 英語授業の学習環境設定について日本人の学生に調査。学生からは、バイリンガルの教員からよりたくさん学べるという意見が出た。バイリンガル教育の論理を述べて、どのように教えればより学生に効果的かという内容も述べた。
13. The divide between policy and pedagogy in EFL high school classrooms in Japan	単	2017年11月	PEOPLE: International Journal of Social Sciences. Vol 3 (3). P.198-217. ISSN:2454-5899 査読 : 有	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムのインプリメンテーションについての論文。教育における授業を企業にどのように生かすことができるのか、という問題について調査し、教員の意見をまとめた。また、推奨するカリキュラム、及びクラス別の差についても述べた。
14. Personality profiles, learning styles and the Japanese University student : An exploratory survey.	共	2017年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 21. P. 73-80. ISSN: 1342-8853 査読 : 有	モレノ・オードリとの共著。日本人の学生に性格診断テストを行い、そのデータの結果を述べ、具体的に日本人学生にどのように授業を行うべきかを説明した論文。
15. Japanese teachers' attitudes towards incorporating CLT in the high school English Language classroom : An ethnographic study.	単	2017年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 21. P. 93-104. ISSN: 1342-8853 査読 : 有	コミュニケーション言語教育と日本の新カリキュラム：教師の意見をまとめた論文。二つの高校に勤めている教員たちに新カリキュラムが始まる前とその後アンケートとインタビューを実施し、コミュニケーション言語教育の経験を述べてもらい、新カリキュラムを実施してどのような効果があったのかを調査した。
16. 語学クラスにおけるイマージョン（没入法）：Immersion in the language classroom	共	2007年7月	第46回九州地区私立高等学校研修会研究集録。P. 197-207 査読：無	藤原和彦との共著。オーストラリア公立ベイサイド高校で行ったイマージョンプログラムを大分私立大分東明高等学校の英語クラスに用いた際の、プログラム作成の過程と生徒の理解度調査の結果を発表した。その後発表に関する質疑応答を行った。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. Incorporating Translanguaging in Japanese EFL classrooms: A workshop and Discussion.	単	2023年6月17日	Kobe JALT: Translanguaging Presentation and Workshop. Mint Kobe Building, Kobe Gakuin University.	発表ではトランスランゲージングについて授業に組み込む方法を紹介した。また、基本的な理論を紹介し、トランスランゲージングをクラスに取り入れた例を紹介した後、参加者がディスカッションをしながら、どうやって自分の授業にトランスランゲージングを活かすか、その方法について話し合った。
2. Promoting Critical Thinking with Bilingual / Multilingual learners	単	2023年5月16日	日下／フォッシー国際交換特別教授職プログラム、Eastern Washington University, Spokane, Washington, USA.	日本の大学の卒業研究科目において実施したトランスランゲージングのアプローチについて報告するものである。まず、トランスランゲージングの理論的背景を紹介し、英語の授業において学習者のL1（日本語）を取り入れることの利点を心理言語学、社会言語学、教育的視点から論じる。その後、授業内容の概説を通じて、トランスランゲージングがいかに学習者の言語リテンション、伝達アウトプット、動機付けの増大をもたらしたかを記述する。その結果、トランスランゲージングを用いて学習者の言語レパトリーの全てを活用させることが、動機付け、言語産出、学習内容の保持、認知方略の増大につながる事が明らかとなった。
2. 学会発表				
1. Incorporating L1		2025年2月	21st Annual	発表では、L2教室において学生のL1を取り入れる方法を紹介し、そ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
in L2 Classrooms through Translanguaging		14日	CamTESOL Conference 2025, Phnom Penh, Cambodia, Feb 14-16, 2025.	れにより批判的思考力とアクティブラーニングを促進する手法を提案した。日本の大学において、教育的トランスランゲージングのアプローチがどのように活用されたかの事例を示すことで、参加者は自らのバイリンガルおよびマルチリンガルの学生に対して、批判的思考力と同時に言語能力を高めるための支援方法についてアイデアを出し合い、検討する機会を得ることができる。
2. Integrating Pedagogical Translanguaging in EFL Classes	単	2024年11月18日	全国語学教育学会 2023年第50回年次国際大会 静岡コンベンションアーツセンターグランシップ JALT 2024: 50th Annual International Conference, Shizuoka Granship, Shizuoka Japan. Nov 15-18	この発表では、日本の大学3年次および4年次の教室におけるトランスランゲージングアプローチの導入による利点と課題を検討した2年間の研究結果を紹介した。本研究では、統合型トランスランゲージングモデルが、第2言語の教室において学生が第1言語を活用しながら言語的・内容的・知識的な発展を促進する過程を明らかにした。また、2年間の調査結果に基づき、学生が自らの全言語レパートリーを授業内で活用することが、言語知識と内容知識の同時発展を可能にし、さらに自己主導型学習の促進にも寄与することを示した。
3. Pedagogical Translanguaging: The Basics	単	2024年5月24日~26	JALT PanSIG Conference 2024, Fukui University of Technology. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会 2024, 福井工業大学。	このプレゼンテーションでは、参加者に教育学的トランスランゲージングPedagogical Translanguagingを紹介紹介した。理論的な概要の後、教室で教育的なトランスランゲージングのアプローチを取り入れるためのタスクとアプローチを紹介し、学生の第一と第二言語をと同時に使う機会が与えると、内容理解と言語習得のサポートができるという。
4. Promoting Critical Thinking in L2 Graduation Seminar Classes	単	2023年11月27日	全国語学教育学会 2023年第49回年次国際大会 つくば国際会議場 JALT 2023: 49th Annual International Conference, Tsukuba, Japan. Nov 24-27	卒業研究の科目で批判的思考力、研究スキルと言語取得の組み合わせた内容を中心した授業でどのように教えるのかを紹介し、どうやって学問的探究を促進することができるのか発表でした。
5. 英語学習のためのAI ツール使用に関するアンケート調査 — 英語リテラシー教育プログラムの実施に向けて—	共	2023年8月19日	全国英語教育学会 第48回香川研究大会 (香川大学教育学部 田中真由美、川西慧、Kevin Bartlett、佐々木顕彦	英語学習にAI (artificial intelligence) を利用するリテラシー教育プログラムの枠組みを検討し、その実施に先んじて学生のAI ツール使用について調査した。その結果、すでに多くの学生がAI に触れ、利用していることが明らかとなり、その多くがAI を肯定的に感じていることがわかった。また、AI を利用した学習については、AI に従来の教師のようなフィードバック機能を求めていることや、全体ではなく部分的な使用など、限定的な使用が適切だと思っていることなども明らかになった。
6. Developing Research Skills in L2 English Classes	単	2023年8月18日	The 21st AsiaTEFL International Conference, Daejeon Convention Center, South Korea	大学生の卒業研究の科目でどのように研究指導をするのかを発表した。卒業論文を書くための研究スキルの指導についてのプレゼンテーション。15週間セミナーのデザインの概要や、批判的思考を取り入れる方法、そしてどうやって学問的探究を促進することなどが含まれた発表でした。
7. From Student, to Teacher, to Researcher, and Back Again:	単	2023年7月29日	武庫川女子大学大学院英子英米文学研究科：院生研究会	研究者になるための旅について発表をした。学生時代から研究者までの生きた経験を紹介し、どのように研究スキルを育ったのかを説明し、現在の研究活動を紹介した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Journeys in Developing Research Skills 8.Promoting Research Skills in Graduation Seminar Classes	単	2023年5月13日	JALT PanSIG Conference 2023, Kyoto Sangyo University, Kyoto, Japan. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会2023、京都産業大学	日本の大学の研究向きの授業において実施したトランスランゲージングのアプローチについて報告するものである。授業内容の概説を通じて、トランスランゲージングがいかに学習者の言語リテンション、伝達アウトプット、動機付けの増大をもたらしたかを記述する。
9.Incorporating CLIL and Translanguaging Approaches in Research Focused Classes	単	2022年11月14日	全国語学教育学会2022年第48回年次国際大会 福岡 JALT 2022: 48th Annual International Conference, Fukuoka International Congress Center, Fukuoka, Japan	大学から卒業するための論文作成が大変な作業である。研究デザインのスキルやデータの収集と分析のスキルは学位プログラムの最後までに普通に教えないので、学生がたまたまに迷う。この論文では、ブルーム分数学を学習者進行のガイドとして生かして、3年生のゼミをどのように教えたのかを紹介する。言語と内容の理解をするために、コンテンツと元号の統合学習、トランスランゲージング・アプローチを使用した。ゼミで、論文の書き方、研究の行う方法と学会発表のスキルと同時に教え、学生が自分の専攻の知識を生かして、研究と専門分野の知恵を生かすことができたことで、このゼミのおかげで、4年の時の卒業論文を書く準備ができたという。
10.Content and Language Integrated Learning in a Japanese University class	単	2022年8月7日	The 20th AsiaTEFL International Conference, University of Negeri Malang, East Java, Indonesia.	大学EAP教室でCLILのアプローチを取り入れることの利点について発表。実践、カリキュラムの設計と実施について発表し、15週間のセミナーの成果を紹介。
11.CLIL and Translanguaging in EAP Classes	単	2022年7月9日	JALT PanSIG Conference 2022, Nagano University, Japan. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会2022、長野県立大学	日本のEAP教室でCLILとTranslanguagingのアプローチを取り入れることの利点について発表。実践、カリキュラムの設計と実施について発表し、15週間のセミナーの成果を紹介。
12.The State of EFL Education in Japan	単	2022年2月26日	The 33rd Spokane Regional ESL Conference, Spokane, Washington, USA.	現在の教育指導要領のポリシーと教室内の行っている英語教育の差について発表。英語コミュニケーション能力を高めるための教える方法も紹介した。
13.Integrating L1 in L2 Classrooms: A Translanguaging Approach	単	2021年12月3日から5日	19th AsiaTEFL International Conference, JW Marriott Hotel, New Delhi, India (On-site and Online Conference).	外国語の教室にL1とL2と同時に使えば、より学生の理解力とモチベーションを高めることができると主張。日本のESPクラスにトランス・ランゲージングを取り入れた。その結果学生コミュニケーション率の増加と、モチベーションが高まったという結果を明けらかにした。このプレゼンテーションでは、どうやって授業を行ったのかを説明し、学生の学期末の調査のデータを紹介した。
14.Bilingual Approaches to Support Japanese EFL Learners	単	2021年11月26日	The 28th PGECR Symposium, The University of Southern Queensland, Toowoomba Campus	日本人学生の外国語学習をサポートするために、日本語と英語を使えば使うほどより学生のモチベーションと理解力を高めるという。この発表で、授業の準備の仕方から教える方法までいくつかのヒントと思考すべきものを紹介した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
15. Assisting in Transition: Translanguaging for New University Students	単	2021年9月11日	(11月26日) JALT College and University Educators Online SIG Conference 2021	学生が高校から大学へ進学した際、英語の授業でいろんなプレッシャーを感じる。高校生の時の授業と大学生の授業ではどのような違いがあるのか、そしてどのようなプレッシャーを感じるのかについて発表した。その結果、授業のながれや、コミュニケーションの仕組みに関する不安と英語を勉強する目的がわからないことで、勉強に関する影響がある。その不安を対策するためにクラスルームにトランス・ランゲージを生かして、学生のコミュニケーション力とモチベーションを高めるという。
16. Transitioning from high school to university EFL classes: Student voices	単	2020年11月	全国語学教育学会第46回年次国際大会【筑波】 JALT 46th International Conference, Tsukuba Convention Center, Tsukuba 11月16-23日	学生が高校から大学へ進学した際、英語の授業でいろんなプレッシャーを感じる。高校生の時の授業と大学生の授業ではどのような違いがあるのか、そしてどのようなプレッシャーを感じるのかについて発表した。その結果、授業のながれや、コミュニケーションの仕組みに関する不安と英語を勉強する目的がわからないことで、勉強に関する影響がある。
17. Translanguaging approaches in Confucian contexts, a case study from the Japanese university classroom.	単	2020年11月	The 18th AsiaTEFL International Conference, KINTEX, Goyang, South Korea (11月26-30日)	アジア地方の学生の外国語能力がヨーロッパに比べてレベルが低いという。レベルを高くするため、学生にニーズを理解させるため、学生の文化を考慮しなければならない。トランス・ランゲージングを使って、学生の理解力とモチベーションをより高めることができると主張。
18. Translanguaging: Theoretical and Pedagogical implications in the Japanese ESP classroom	単	2020年9月	JALT College and University Educators SIG Conference 2020, Kumamoto. (9月17日)	学生は専門知識を身につけているが、英語で伝えるレベルが低いという。専門用語やプレゼンテーションレベルを高くするため、そしてニーズを理解させるため、学生の就職先について考えなければならない。トランス・ランゲージングを使って、より学生の理解力とモチベーションを高めることができると主張。
19. Translanguaging Benefits in Japanese EFL classes	単	2019年11月	全国語学教育学会第45回年次国際大会（名古屋） JALT 45th International Conference. WINC Aichi, Nagoya. (11月1-4日)	L1とL2と同時に使えば、より学生の理解力とモチベーションを高めることができると主張。4つのクラスを調査した。2つのクラスでトランス・ランゲージングを使い、残りの2つのクラスでは使わなかった。トランス・ランゲージングを取り入れた方がコミュニケーション率の増加と、モチベーションが高まったという結果を述べた。
20. Reflecting on research' How research findings shaped pedagogical practice	単	2019年6月	The 23rd PGEER Symposium, The University of Southern Queensland, Springfield Campus (6月28日)	言語教育に関する研究の結果を通じて、学生は、英語でコミュニケーションを図るときに不安があることが判明した。その結果を利用して、効果的な授業を行うことができるようになった。この発表では当研究のデータを公開し、新たな教授法を紹介した。
21. Code-switching in Japanese EFL praxis: How translanguaging can benefit language learners.	単	2019年2月	The 7th Bremen Symposium on Language Learning and Teaching at Universities. University of Bremen, Germany (2月28日~3月2日)	日本の大学生にとって、習得言語だけを使用する授業より母国語である日本語をある程度取り入れたほうが効果的である、と主張した。
22. Integrating L1 in	単	2018年10月	Otemae	L1とL2と同時に使えば、より学生の理解力とモチベーションを

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
L2 classrooms to increase motivation, comprehension, and the communicative abilities of Japanese learners.			University and Kobe JALT Joint Symposium on World Englishes, Bilingualism and Cross-Cultural Education (10月21日)	高めることができると主張。4つのクラスを調査した。2つのクラスでトランス・ランゲージングを使い、残りの2つのクラスでは使わなかった。トランス・ランゲージングを取り入れた方がコミュニケーション率の増加と、モチベーションが高まったという結果を述べた。
23. Improving communication and increasing motivation through the incorporation of translanguaging.	単	2018年9月	JALT CUE Conference, Rikkyo University, Tokyo. (9月15 - 16日)	日本語と英語を一つの言語システムとして捉え、学生がアクセスできる資源として使えるというトランス・ランゲージングについて発表した。二つの言語をクラスで使い分ければ、学生の理解力がより高まるという。4つのクラスを調査し、2つのクラスでトランス・ランゲージングを使い、残りの2つのクラスでは使わず学期末のテスト結果や英語プレゼンの結果について分析し、その研究の結果を述べた。そして質疑応答を行った。
24. Discovering what approaches work in Japanese EFL classrooms: Considerations for teaching and learning in Japan.	単	2018年7月	The 21st PGEER Symposium, University of Southern Queensland Springfield campus (7月27日)	オーストラリア人の研究者に、日本の社会・文化や教育の違いを説明し、日本人向けの授業を行うためのアドバイスを述べた。その後、質疑応答を行った。
25. Applying translanguaging techniques in Japanese EFL settings.	単	2018年4月	IAFOR: The Asian Conference on Language Learning, Arts Centre of Kobe (4月27-29日).	トランス・ランゲージングについて発表した。二つの言語を使い分ければより学生の理解力が高まるという。4つのクラスで調査し、2つのクラスでトランス・ランゲージングを使って、残りの二つのクラスでは使わずに、学期末のテスト結果や英語プレゼンの結果について分析し、その研究の結果を述べた。
26. Incorporating translanguaging in EFL university classrooms.	単	2018年1月	関西学院大学理工学部のファカルティ・ディベロプメント発表会 (1月15日)	日本語と英語を一つの言語システムとして捉え、学生がアクセスできる資源として使えるというトランス・ランゲージングについて発表した。二つの言語を使い分ければ、より学生の理解力が高まるという。4つのクラスに調査し、2つのクラスでトランス・ランゲージングを使って、残りの2つのクラスでは使わずに、学期末のテスト結果や英語プレゼンの結果について分析し、その研究の結果を述べた。その後、質疑応答を行った。
27. The divide between policy and practice in EFL high school classrooms in Japan	単	2017年7月	20th International Conference on Teaching, Education and learning, University of Barcelona, Spain (7月25~28日)	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムのインプリメンテーションについての論文。教育における授業を企業でどのように生かすことができるのか、という問題について調査し、教員の意見をまとめた。また、推奨するカリキュラム、及びクラス別の差についても述べた。
28. The divide between pedagogy in EFL high school classrooms in Japan and what it means for university teachers	単	2017年1月	関西学院大学理工学部のファカルティ・ディベロプメント発表会 (1月17日)	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムのインプリメンテーションについての論文。教育における授業を企業でどのように生かすことができるのか、という問題について調査し、教員の意見をまとめた。また、推奨するカリキュラム、及びクラス別の差についても述べた。
29. The implementation of CLT in Japanese High Schools: Organizational	単	2013年9月	全国語学教育学会・大分部 Second Annual Oita JALT Language	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムについて発表。南クイーンズランド大学院の卒業論文に行ったデータの説明やコミュニケーションを中心とする教育方法などについて話をした。そのあと質疑応答を行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
hindrances to a smooth transition			Teaching Symposium (9月19日)	
30. 日本でのコミュニケーション言語教育。(Communicative Language Teaching and the New Curriculum)	単	2012年10月	全国語学教育学会・大分部(10月27日)	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムについて発表。南クイーンズランド大学院の卒業論文に行ったデータの説明やコミュニケーションを中心する教育方法などについて話をした。そのあと質疑応答を行った。
31. 語学クラスにおけるイマージョン(没入法): Immersion in the language classroom	共	2007年7月	第46回九州地区私立高等学校研修会(7月26~27日)	九州地区私立高等学校研修会の大会に藤原和彦先生と発表した。オーストラリア公立ベイサイド高校で行ったイマージョンプログラムを大分市立大分東明高等学校の英語クラスに用いた際の、プログラム作成の過程と生徒の理解度調査の結果を発表した。その後発表に関するQ&Aを行った。日本語で発表。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2023年5月から現在	JASELE
2. 2020年4月から現在	Asia TEFL
3. 2017年4月から現在	Japan Association of College English Teachers
4. 2007年6月から現在	Victorian Institute of Teaching
5. 2006年6月から現在	Japanese Studies Association of Australia
6. 2006年6月から現在	Asian Studies Association of Australia
7. 2006年5月から現在	Japan Association for Language Teachers